

# インドへのまなざし（２）      トーマス・コリヤッ トの手紙

著者	難波 美和子
雑誌名	文学研究論集
号	12
ページ	91-106
発行年	1995-03-20
その他のタイトル	Lokking at India (2) : The Letter of Thomas Coryat from the Mughal Court
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/14176">http://hdl.handle.net/2241/14176</a>

# インドへのまなざし

## (2)

### —— トーマス・コリヤットの手紙 ——

難波美和子

イングランド、サマセットシャー、オドカム Odcombe 出身のトーマス・コリヤット Thomas Coryat (または Coriat) (1577-1617) は1612年10月に、東方への旅に出発した。彼は国王ジェームズ1世の息子ヘンリー王子の宮廷の一員であり、人魚亭 Mermaid Tavern の常連からなる Sirenicall Gentlemen の一員、そしてベンジャミン・ジョンソン Benjamin Johnson、ジョン・ダン John Donne らとも交友のある当時の文人の一人だった<sup>1)</sup>。

彼は読書や詩作、議論ばかりではなく、外国を実見することに関心を持っていたと思われる。それはまた、文人として体験を著述することだった。コリヤットはすでに、1608年にヨーロッパ諸国を旅し、その見聞記を1611年に出版していた<sup>2)</sup>。この本は好評を博したらしく、同年のうちに補遺が出版されている<sup>3)</sup>。次いで、彼はより遠方の見聞を得て、それを出版するという意図を実現するために、東方への旅に出たのである。彼はまず海路でコンスタンティノープル Constantinople<sup>4)</sup> へ向かった。そこから同国人たちと共に聖地 the Holy land を旅して、アレppo Aleppo、ダマスカス Damascus、エルサレム Jerusalem (Jerusalem) 等の都市を巡った。しかし彼はこうした聖地巡礼を終えると、一行と分かれてアレppo Aleppo からペルシアを経てムガル Mughal<sup>5)</sup> 朝下の北インドを目指す旅を続けたのである。

イギリス東インド会社<sup>6)</sup> は1600年の特許状によって成立し、ポルトガルやオランダと競合しつつあった。会社はムガル宮廷に社員を常駐させ、商船を往来させていた。もしコリヤットがインドへ行くことを目的としていたのであれば、このような船を利用する可能性もあったはずである。しかし、彼は陸路を選んだ。その理由は、目的の一つが聖地巡礼であり、また、彼がメソポタミアからペルシアの地域を踏破することを望んだためであろう。それでも、彼はインドに到着後は東インド会社の駐在員に保護を求めることが出来、そのことを承知していた。この点で、彼は明らかにラルフ・フィッチ Ralph Fitch とは異なる状況にあった。

そしてまた、彼は商人ではなかった。彼は帰国後に、訪れた国々の見聞記を出版するために旅をし、観察し、記録した。彼は信心深いクリスチャンであったことが手紙から窺えるし、イスラム教徒との宗教問答も辞さない人物だったが、宣教を意図していたわけではない。彼は、商取り引きも宣教も目的とせず、好奇心を動機として、その表象を目的として、インドに向かったのである。このイングランド人の文人には、インドはどのように映り、彼はそれをどのように表象したのだろうか。

しかし、彼は1617年12月に、キャンベイ Cambey 湾に面するスーラト Surat で亡くなり、友人たちに約束した旅行記を出版することはなかった。その代わり、彼が友人や母に宛てた手紙が1616年と1618年にパンフレットとして出版された。そこには彼が著作で初めて明らかにするつもりで述べなかったこともあるだろうが、コリヤットがインドへの旅と滞在をどのように伝えたかを読み、彼が何をどのように見たのか、そして、ロンドンの出版者がいかなる形を与えたか読み解いてみよう。

資料は、*Greeting from the Court of the Great Mogul*, 1616<sub>7</sub>と *Mr. Thomas Coriat to his Friends in England sendeth greeting*, 1618であるが、後者についてはリプリント版が入手できず、出版の体裁なども不明である<sup>80</sup>。従って、前者を中心に述べることにする。

### 《ムガル宮廷からの手紙》

1616年に出版されたパンフレット『トーマス・コリヤット、イングランドの文人にして我が王国の紳士である旅行者、その同郷人への手紙、特に毎月第一金曜日にブレッドストリート Breadstreet の人魚亭に集う the Sireniacall Gentlemen への手紙。東インド、アジメール市なる大モグール Mogul の宮廷より』はタイトル・ページと「読者へ'to the Reader'」、扉絵を除いて56ページの冊子である。タイトル・ページには象に乗った人物が描かれている（図2）。「読者へ」に続いて二枚の木版画があり、一枚目は森の中を杖をついて歩く人物で、長い髭を生やし、老人のようである（図3）。二枚目はタイトル・ページと同じもので、下に賢者 our wits, すなわちコリヤットであることを示すコメントが付けられている。同一の画は本文の27ページでも用いられている。

このパンフレットには、四通の手紙が含まれている。順に挙げると、(1)サー・エドワード・フィリップス sir Edward Phillips 宛 (2) Maister L.W. 宛 (3) 詩人諸氏 Sireniacal Gentlemen 宛 (4) 母 his Mother 宛、である。これらはいずれもインドのアジメール Asmer (Ajmer) <sup>9</sup>で書かれた。「読者へ」がコリヤット本人によるものかどうかは不明である。しかし、彼が不在の間に、手紙を編集して出版されたことを考えるとおそらく出版社のものと考えられる。

以下、四通の手紙で用いられた表象を順次、検討してみる。

《騎士、記録長官、サー・エドワード・フィリップス閣下へ、チャンセリー・レイン Chancery-Lane もしくはワNSTEDD Wanstead の自宅宛て》

この手紙には、1615年聖ミカエル祭（9月29日）の日付がある。フィリップスはコリヤットの名づけ親の息子であった。この手紙で、彼に対してコリヤットは旅に関する説明や感想などを述べていない。四通の手紙は同じ便で送られたため、コリヤットは繰り返し書くことを避けたのである。フィリップスの秘書であり、自分の友人であるホウィティカー Whitaker への手紙に最も詳しく書き、他の人々にはホウィティカーから聞いてくれるように、と頼んでいる。従って、この手紙はフィリップスへの挨拶、無事であることを神に感謝する言葉を述べるものである。だが、ここにはコリヤットの性格や、この旅に対する彼自身の見方が述べられている部分がある。

コリヤットは自ら Wits と自認し、自負の強い人物だったようである。彼は自分を次のように表現する。

...I belleue you will doubt whether this bee the true hand-writing of your once *Odcombiam Neighbor, Thomas Coryate*. But your honour may soone very infallibly and apparantly perceiue it to be true; partly by the forme of the style, which is just answerable to that manner of speech that you haue heard and obserued in me, sometimes in my Linsie-woolsie Orations; and somtimes in my extrauagant discourses:... (pp.2-3)

Yea, I hope my generall countrie of England, shall one day say, that *Odde-combe*, for one part of the word, may truelie be so called:... for breeding an odde man, one that hath not his peere in the whole kingdome to match him. (p.5)

そして彼は東方への旅が、自分がすでに身につけている四つの言語（イタリア語、アラビア語、トルコ語、ペルシア語）と‘the most remarkable matters’の探究者としての正確な視線によって「うぬぼれ抜きに」多くのものを得ている、という<sup>10</sup>。彼のことをエドワード・テリー Edward Terry は「貪欲な眼の持ち主」<sup>11</sup>であると述べ、コリヤット自身が述べるように、諸言語を身につけていたことを認めている。コリヤットは宣教の必要から言語の習得の必要を感じていた宣教師たちとは別に、西アジアの言語が話せることの意義を明確に意識していたと思われる。彼は他者性を、言語の違いによる意志疎通の困難と結び付けていたのである。彼は「何語で」会話したかを重視した点で、先に読んだフィッチとは異なる認識方法を身につけて

いたことが考えられる。

彼はインドへの旅をヨーロッパ諸国の旅に続く、第二の旅とみなしている。「東インド」が地理的認識のみならず意識の上でも連続している表れであろう。しかし同時に、彼はこの旅をユリシーズ Ulysses (Vlysses) の旅に比してもいる。ユリシーズのように十年を旅に過ごす述べることで、彼はそれがあたかも異界遍歴であるかのような趣を感じていた、あるいは仮想していたのではないか。この手紙の時点で、彼の旅は三年を経ていたのだが、「ユリシーズに匹敵しうるように、後七年を strange countries を見るために過ごす」ことを表明している<sup>12</sup>。彼はその体験をユリシーズが自分の冒険をパイアケスの王宮で語ったように、ロンドンの人魚亭で語ること考えていたのだろう。そのために、彼にとって東方の国々は語るべき何かでなければならなかったのではないか。それが手紙を委ねる人物を「the court of the most puissant monarch the Great Mogul に滞在する商人」と紹介し、自分が滞在する場所を「this glorious court of the Mogul」と述べることは、故国に知られていない国の勢力を説明するだけでなく、語るべきものであることを明示する作用を持つのである。語るべきことは以下の手紙に書かれた。

#### 《最愛の友、L.W.氏へ》

L.W. すなわちローレンス・ホウィティカー宛の手紙は四通の中で最も長い。1615年9月29日の日付で書かれた後に追伸が書かれた。この手紙から、コリヤットがアレppoから友人たちに手紙を出していたことがわかる。従って、ここではそれ以降の旅とアジメールでの滞在について主として語られる。ここで述べられたコリヤットによるインド表象を第二のパンフレットも参考にしながら見ていこう。

コリヤットは北シリアのアレppoを出発し、ユーフラテス Euphrates 河を渡ったが、河を下らず、北東へ向かい、タブリーズ Tabriz (Tauris) から南東へ転じてイスファハン Esfahan (Spahan) から東へという道筋を辿っている(図1)。後の母への手紙の中で彼は、目的地へ向かうキャラヴァンを見つけるために待って過ごす時間が多かったと述べているので、この経路はある程度彼自身が意図したものと考えられる。インドへ向かうのであればフィッチらのように、ベルシャ湾に出て海路を選んだ方が容易だったと思われるが、彼は陸路、特にかなり迂回する道筋を取った。

まず彼は「the noble riuer Euphrates」を「the cheefest of all that irrigated Paradise, wherehence, as fro their original, the three other riuers were deriued」<sup>13</sup>として捉えているように、中世的地理観を示しているし、「Vr of the Chaldeas, where Abraham was born」<sup>14</sup>への到着を述べている。見たいと思っていた Abraham の家は破壊され

ていて見る事が出来なかったのだが。この他にもコリヤットはこの地域では同時代の地名や状況よりも聖書や古典書の著述を重視しているようだ。それは例えば、次のような書き方に現れている。

...heretofore called *Ecbatana*, the sommer seate of *Cyrus* his court, ..., now called *Tauris*,.... (p.12)

...a citty that in *Strabos* time was called *Arsacia* in *Media* the higher, now *Casbin*, once the royall seate of the *Tartarian* Princes, .... (p.13)

...from *India* into the countrey of *Scythia*, now called *Tartari*, to the Cittie *Samarcanda*, .... (p.51) <sup>15</sup>

彼にとってはこの地域は何よりも先人によって記述された土地であり、聖書やギリシア、ラテンの著作に述べられた領域を辿ることが彼の目的であった。それが彼の目的の一つだったのだろう。しかし存在の正当性は、現前するものではなく、彼が身につけてきた古典の方にあるのが彼の意識である。彼が見ることを欲したものは、かつて叙述されたものの現在の姿ではなく、かつて叙述されたものの自体だった。彼の旅は過去を指向している。

しかしインドに入ると、こうした古典の裏付けは必ずしも存在しなくなる。またコリヤットがこの手紙を書いているアジメールのムガル宮廷は現在、自分の眼によって説明するほかないものだった。それでもインドにおいて彼の古典への指向が消えているわけではない。機会があると彼の意識は古典に典拠を求めることになる。<sup>16</sup>

...the famous Riuer *Indus*, ... his originall out of the mountaine *Caucasus*, so much ennobled by the ancient, both Poets and Historiographers, *Greeke & Lattine*;.... (p.14)

I haue beene tin a Citie in this Countrie, called *Detee*<sup>17</sup>, where *Alexander* the Great ioined battell with *Pontus*, K. of *India*, and conquered him; and in token of his victorie, erected a brasse pillar, which remaineth there to this day. (p.29)

更に、ラホール *Lahor* とアーグラ *Agra* の間の地域の山中の住民について、兄弟による一妻多夫の習慣を述べるとき<sup>18</sup>、コリヤットはストラボン *Strabo* のアラビア・フェリクス *Arabia Felix* の記述を思い出すのである。彼は見知らぬものに出

会った時、古典に典拠を見出して未知のものではないと安堵するという心理作業を行っていたように思われる。コリヤットはトルコやペルシアには説明的な形容詞をほとんど付けていないのだが、最初にインドに言及するとき、'a large tract of the noble and renowned India'<sup>19</sup>と述べることは、「知られていない」が「未知のものではない」という彼の意識が反映しているように感じられる。先人によって言及されているからこそ、語るべきものなのだ。

彼はジャハングール Jahangir に対するペルシア語の演説の中で、旅の目的を「第一に君主に会うこと、第二に象を見ること、第三にガンジス Ganges 河を見ること、第四にタンバレイン Tamberline の墓を見ること」<sup>20</sup>としている。これを単純に受け入れることはできないが、彼の旅が好奇心に基づくものであることを示している。そして手紙の中に書かれた事柄は、その言葉を証拠立てている。

コリヤットは宮廷に出入りできることを友人に向かって誇り、君主自身に関心を示している。当時の君主<sup>21</sup>はジャハングールであり、コリヤットはその実名セリム Selim で記録している。彼によって表象されたジャハングールは「肌の色は黒くも白くもなく、……オリーブ色としか説明でき」ず「身長は私くらいで、とても太っている」。「その日常は華麗」で、「毎年、黄金の秤で体重を計り、神聖さを保つ。そして貧しい人々に施しをする」<sup>22</sup>。そしてまた、「千人の女性を抱えており、その最高位（彼の皇后）は Normal という」<sup>23</sup>ことを伝えている。第二のパンフレットの中のジャハングールに反抗した皇子ホスロー Khusrau (Cursarou) の処罰について記録するなどから、コリヤットが宮廷政治に関する話題も集めていたことが窺える。ただしムガルと周辺の勢力との関係をどのように捉えていたかはよくわからない。アジメールでの一年を越える滞在の間に、'the Indostan, the bulgar language spoken in East-India'<sup>24</sup>を身につけそれをおそらくガンジス河への旅で役立てたが、コリヤットはインドでも、宮廷を中心とする世界に生活する意識を持っていたようだ。国家の中心としての宮廷から、国全体を見渡す中央集権的な意識を彼が持っていたと断言しないまでも、彼が君主を、フィッチよりも重視していたことは確かだと思われる。

彼もまた、インドの繁栄と土地の広大さを記述する。ラホールは「世界最大の都市の一つ」であって、コンスタンティノーブルよりもはるかに大きく<sup>25</sup>、アーグラと呼ばれる another goodly citie はラホールよりも大きい。「高名な都市」ラホールからアーグラへの地域は「見たこともないほど美しく平ら」で「土地の平らな様ほど印象的なものはない」し、「かつて楽園が存在したバビロニア Babylonia を除いて、ここより豊かな土地はない」<sup>26</sup>という具合であり、「彼 (the Mogul) の歳入は4000万クラウンであるのに対してトルコ (王) は1500万、ペルシア (王) は 500

万である」<sup>27</sup>と具体的数値の挙げている。ここには世界を国家によって分割する意識が見られ、その富の管理者としての君主の姿がある。またコリヤットはフィッチほどにも都市の外観や人間を記述していないが、必ずしも彼がそれらのことに関心を持ったなかつたとは断言できない。むしろ、彼がムガル宮廷とその周辺に関心を持ったことが注目されるのである。

第二の目的として挙げた「象を見る」ことが最初から彼の関心であったかどうかはわからない。しかし、彼はこの旅の間に見た動物の中で、最も象に興味をひかれたらしい。コリヤットはペルシアを旅している時、ペルシア王の宮廷へ向かうサー・ロバート・シェリー Sir Robert Sherley 夫妻<sup>28</sup>の一行と出会った時、次のように述べている。

Besides other rarities that they carried with them out of India, they had two elephants and eight antlops, which were the first that ever I saw; but afterwards, when I came to the Moguls court, I sawe great store of them. (pp.15-16)

パンフレットでは、ここに、アンテロープ antelope (antlop) と思われる木版画を挿入している(図4)。彼はムガル宮廷で見た動物についても次のように述べている。

Hee keepeth abundance of wilde beasts, and that of divers sorts, as lyons, elephants, leopards, beares, antlops, unicorne; whereof two I have seene at his court, the strangest beasts of the world. (pp.24-25)

ここで、彼の言うユニコーン (unicorne) の木版画が挿入されている(図5)が、その画はヨーロッパの伝説が描く伝統的なユニコーンそのものである。コリヤットが述べているのはおそらくサイであろうが、動物について、特に彼は王が象を戦わせる光景に感銘を受けたように思われる。

Twice every week elephants fight before him, the bravest spectacle in the worlde. many of them are thirteene foot and a halfe high; and they seeme to juttle together like two little mountaines, .... Of elephants the King keepeth 30,000 in his whole kingdome at an unmeasurable charge;.... (p.25-26)

その感銘から、彼は次のように書くのである。'I have rid upon an elephant since I came to this court, determining one day (by Gods leave) to have my picture ex-



pressed in my next booke sitting upon an elephant.<sup>29</sup> この意志を受けて、出版者はこのページに象の上に乗ったコリヤットの画を掲げたのである(図2)<sup>30</sup>。また彼はある王からムガル王への貢物の中でも、特に象とその飾りの豪華さを記述している<sup>31</sup>。ここで象はインドの代表的な動物であることと共に、ムガルの経済的、軍事的権力を証すものとして表象されている。

次いでコリヤットはガンジス河を見ることを目的の一つに挙げている。ホウィティカー宛のこの手紙は、始め、ガンジスへ行ってから、この地を去るつもりであるという言葉で結ばれており、彼はこの河を'the captaine of all the river of the world'<sup>32</sup>と呼んでいる。プトレマイオス Ptolemy の地図にも描かれた有名な河として、彼が以前からその名を知っていたことは間違いない。彼のガンジスへの旅は1617年に母宛てに書かれた手紙の中で述べられている。彼は河で行われるある祭りを見、河への供儀のもようを観察した。彼はこの時、感動と同時に嫌悪感を表明している。すなわち、'the memorable meeting of the gentle people of this country, called baiens'と述べ、祭りについて'Such a notable spectacle it is, that no part of all Asia'と言う一方で、'superstition and impiety most abominable in the highest degree of these brutish ethnicks'として否定するのである<sup>33</sup>。このアンビヴァレントな態度は、フィッチにも共通して見られた。

このような場面を除くと、彼の宗教的態度は一貫しているようだ。彼はキリスト教徒としてイスラム教には否定的であるが、イスラム教徒から「不信心者」と詰られたことに対し、両者には本質的な差異はないという論法を用いる。キリスト教がより純粋な教えであると説くのではあるが<sup>36</sup>。その立場において、彼はジャハングールを好意的に見ている。彼によると、このムガル王は他の Mahometan princes とは異なり、Isazaret Eesa, the Great Prophet Jesus を敬っている。後の母への手紙に添えられたムルタン Multan (Moltan) での宗教問答の説明で、彼はムガル領では他のイスラム教国よりもキリスト教徒が自由に話せる、と述べている<sup>35</sup>。しかし、コリヤットはムガルのこの寛容さの背景にある多数のヒンドゥー教徒の存在には目を向けてはいない。彼は果たしてキリスト教国におけるイスラム教徒の信仰の可否、そして当時のイングランドにおけるカソリック信徒の問題をそこから考えたかどうかは疑問である<sup>36</sup>。その点に感銘を受けているというより、当然の権利とみなしたのではないか。

そしてガンジス河を訪れた後、彼は帰途につくつもりであった。しかし出発が遅れ、その間にジェイムズ1世の国書を携えた大使トーマス・ロー Thomas Roe の船が到着し、コリヤットはその報せも追伸として手紙に書き記した<sup>37</sup>。

### 《尊敬すべき友愛会員 Sireniacal Gentlemen へ》

この手紙もフィリップスへの手紙同様、挨拶を中心としたものである。ここでもインドは具体的に描写されてはいないが、やはり彼の態度を反映した表現も見られる。友人たちは彼を通じて遠い東洋の国を知ろうとしており、彼はそれに応えようとしている。

...the most famigerated region of all the East, the ample and large India; assuring my selfe that because I am not able to requite your love with any essentiall gratulations, other then verball and scriptall, you wil as lovingly entertaine my poore letters, beeing the certaine manifestation of an ingenious minde, as if I should send unto you the minerall riches or drugges of the noble country. (pp.38-39)

その約束は帰国の予定とともに述べられる。この中ではコリヤットはインドからヨーロッパへの経路を述べず、ギリシアからイタリアに掛けての地域を巡る予定を上げている。特にヴェネツィア Venice の再訪を楽しみにしていたようだ<sup>38</sup>。彼は帰国を考え、改めて旅の長さ、語るべき物事の多さを考えたようで、次のように述べている。

... and the manifold occurrences and observations of speciall worke<sup>39</sup> in this vaste tract: for it wold be such a fastidious discourse that it could not be wel comprehended in a large sheete of paper. (p.41)

とはいっても、彼はホウィティカー宛の自分の手紙が伝え得ることは伝えているという自負も持っており、「もう一度手紙を書くとしたら、それは Crambe bis Coc-ta'キャベツを二度煮る'ことを示すことだ」ともいう<sup>40</sup>。即ちコリヤットがホウィティカー宛の手紙を彼のインド表象として纏まったものと考えていたことがわかる。

そして彼は誇らしげに自らを 'the Hierosolymitan-Syrian-Mesopotamian-Armenian-Median-Parthian-Persian-Indian Leggestretcher of Odcomb in Somerset' と名乗る<sup>41</sup>が、それは単にそのような旅をなし遂げたというだけではなく、彼の古典の著作への指向から想像するに、それを文字によって残したということも含まれているはずである。

### 《愛する母へ》

母親への手紙には簡単に、旅の道程とその様子が述べられている。聖地の各地を巡ったこと、そして天国の水であるユーフラテス川を渡り、エルサレムから2700マ

イル離れたアジメールまで徒歩で、そして元気に到着したことを告げる。彼は「キャラヴァンの一員として安全に旅し」、「キャラヴァンは多くの人間がラクダ、馬、ラバ、ロバに荷物を乗せて行き来している」と説明している。特にイスファハーンからアーグラへの旅では‘the caravan ... contained 2000 camels, 1500 horses, 1000 and odde mules, 800 asses, and sixe thousand people.’という<sup>42</sup>。この数字がそのまま信用できるとは思えないが、極めて大規模なキャラヴァンが両所を往来していたことを示していよう。

そしてやはりムガルでの事柄は述べず、帰国に筆を移す。彼はここでも更に七年の間、旅を続けることを述べ、その計画を、まずサマルカンド Samarkand (Samarcanda)を訪れ、その後、バビロン Babilon やニネヴェ Nineve (Ninivy), アララト山 Ararat といった、往路で訪れられなかった聖書に登場する土地を訪れるとしている。この手紙で、コリヤットは自分の帰国を待っているだろう母の気持ちを思いやり、また自分の帰国まで元気でいてほしいという願いが読み取れるのである。

### 《書かれなかった旅行記》

しかし、コリヤットは1515年秋の予定にも関わらず、更に一年以上、アジメールで過ごす。その理由を、彼は1616年10月の母への手紙の中で、言語習得の目的と経済的事情によるとしている。その間に彼は土地の言葉を身につけ、また王の前でペルシア語で演説を行った際に金を授けられるなどのことがあり<sup>41</sup>、旅を続ける経済的用意は整ったという。サマルカンドへ行ってティムールの墓を見るという希望は、ジャハンギールとタルタリアの君主たち Tartarian Princes の不和から中止するよう勧告を受けていた<sup>44</sup>。結局彼はしばらく大使ローのペルシアへの出発を待って行動を共にした後、彼らと分かれて、スーラトで1617年11月に亡くなったのである。彼は、海路を取るよう計画を変更したのだろうか。

第二のパンフレットは1618年の出版である。それはアーグラで書かれた母親宛の手紙で、そこにはアジメールに留まっていた理由を述べたほか、次のような文書が含まれている。ジャハンギールに対するペルシア語の演説文とその英訳、イタリア語で行ったイスラム教徒に対する反駁の演説文の英訳、ガンジス河を訪れた際に見たもの、そして相互に関連のないエピソードが12件。その中には、前に挙げた、反ジェスイットの意見、ホスロー皇子の話、ムーアの王が密かにキリスト教に改宗した話などがある。また、その他、アクバル Akbar (Ecbar Shaugh) が魔法を使った話<sup>45</sup>、ポルトガルからの危険を予言された話、王の恵み深さなどの話がある。このパンフレットには、ラクダに乗ったコリヤットの木版画が付けられていた。

第一のパンフレットについて見たようなコリヤットの世界把握の方法、インドの事物の描写と、第二のパンフレットの概観からすると、どのようなインドのイメージが描き出されたと考えられるだろうか。

まず、東方への旅を過去への旅と位置づける認識である。コリヤットにとって、東方と聖書や古典古代とのあいだには明確な連続性が見られる。この意識はフィッチには見られなかったもので、コリヤットのギリシアやラテンを通じた学問教育によって持ち込まれたと推定できる。他方、出版業者によって附された木版画は、読者に対してインドの怪物を和らげられた形ではあるが、印象づける。つまり、巨大な象と、牙があり、肉食獣の顔をしたアンテロープ、馬の身体に角を生やした伝統的なユニコーンである(図4・5)。これは、画が、言葉が表していないものを表象した例である。この画は明らかに、現前したインドではなく、ヨーロッパの伝統によって生み出された表象である<sup>46</sup>。表象はその背後に自文化を根強く引きずっているのだ。この時期、ロンドンにはインドから帰国したイギリス東インド会社の社員がおり、動物を実見していた可能性が高い。しかし、出版業者は図版を既存の書物から引用するという方法を選んだのである。

自文化表象の根強さを、もう一つ、ムガル王の表象の仕方に見ることができるだろう。第一のパンフレットの第二の手紙によれば、ペルシアのかなたのムガル王は白人でも黒人でもなく、トルコよりもペルシアよりも豊かで、貧しい者に施しを行い、しかもイーサすなわちイエス・キリストを崇める。こうした記述自体が事実と異なるわけではない。しかしこうした表象はヨーロッパのキリスト教徒のイコノロジーにおけるプレスター・ジョン Prester John のイメージと重なるであろう。プレスター・ジョンの手紙という文書、そしてマルコ・ポーロ、マンデヴィルによるその記述と。彼はそこでは、異教徒たちを支配するキリスト教徒の王とされているのである。もちろんムガル王が伝説に言うプレスター・ジョンとは異なる存在であることは読者にとって自明なことだろう。しかし、こうしたイメージは厳密に一致する必要はないのであり、彼らは「それらしきもの」として仮託する存在をそこに見出すことで、既知の知識体系の真実性を確認するのである。そのイメージを補強するのが、第二のパンフレットにある、アクバルが魔法を使ったという挿話であり、ムーアの王が密かにキリスト教に改宗したという物語である。

このような伝統的知識体系を保証する一方で、コリヤットは土地の言葉を身につけるという態度を示した。彼が身につけた言葉は、現地の人間との関係に新しい展開を見せると想像できる。ただ彼の意識には、古典的な知識が確固としてあり、その言語が彼にどう影響を与えたかは明らかではない。しかし彼はムガル支配下の民衆の言語がペルシア語ではないということを確かに「発見した」のである。

トーマス・コリヤットの書簡の特徴は、彼の旅が好奇心を主たる動機とし、それを記述することを目的としていたという点である。彼の旅は陸路を踏破したことで、キリスト教徒の側から見て、インドを地理的連続性で捉え、その一方、古典的知識によって時間的不連続性を持ち込んだものとなった。そしてまた、新しい装いのブレスター・ジョン、すなわちヨーロッパの同盟者の影を浮かび上がらせたのではないだろうか。

## 注

1. Prasadによれば、Shakespeareの*Measure for Measure*に登場する'brave Master Shoe-tie the great Traveller'はコリヤットの最初の旅を反映したものであるという (Prasad, *Early English Travellers in India*, 1985, New Delhi, p.170)
2. *Coryats Crudities Hastily gobbled up in five Moneths travells in France, savoy, Italy, Rhetia, commonly called the Grisons country, Helvetia, alias Switzerland, some parts of high Germany, and the Metherlands; Newly digested in the hungry aire of Odcombe in the County of Somerset, and now dispersed to the nourishment of the travelling Members of this Kingdome.*
3. *Coryats Crambe, or his Colwort twice sodden.*
4. 1452年以来、オスマン・トルコ帝国の首都であるが、コリヤットは東方からこの都市を見るとき、MahometanであるTurksの領土とChristendomというアンビヴァレントな意識をもっていたように思われる。
5. コリヤットの表記は第一のパンフレットでは'Mogul'であるが、第二のパンフレットでは'Mogol'と変わっている。現在はMughalに統一されている。
6. 当時の名称は、The Right Worshipfull Company of merchants in London that Trade for East India.
7. *THE ENGLISH EXPERIENCE, ITS RECORD IN EARLY PRINTED BOOKS PUBLISHED IN FACSIMILE, no.30, THOMAS CORYATE, GREETING FROM THE COURT OF THE GREAT MOGUL, 1616*, (New York; Da Capo Press, 1968.)
8. 両者とも W. Foster, Ed., *Early Travels in India*, London, 1921. (New Delhi, 1985)を参照した。
9. 第一のパンフレットでは'Asmer', 第二のパンフレットでは'Azmer', 現在は'Ajmer'と表記される。
10. Coryat, 1616. p.6.
11. Foster, p.284.
12. Coryat, 1616, pp.6-7.
13. Ibid. p.11.
14. Ibid. Vr (Ur) は現在のOrfah.

15. これは母への手紙の中の記述である。
16. しかし彼が挙げるのは聖書のほかはギリシア、ラテンの著作か作品である。マルコ・ポーロやマンデヴィルは引用されない。ホウィティカー宛の手紙に付された詩の中で、わずかにマンデヴィルの名が挙がっているだけである。
17. Detee はDelhi のこと。
18. Coryat, 1616. p.18. 一妻多夫の習俗はチベット系民族だけでなく、ヒマラヤ山脈中に広がっていたのかもしれない。
19. Ibid. p.13.
20. Foster, pp.264-265. なおタンバレインはティムール Timur のこと。
21. コリヤットはムガールの国土を'Kingdom', 君主を'King'もしくは'Prince'と記述している。'Mughal' 'Emperer' という用語はいつからどういう理由で使われるようになったのだろうか。
22. Ibid. pp.13-14.
23. Ibid. p.26. Normal は、おそらく、ヌール・ジャハンーン Nur Jahan（世界の光）として知られる女性。美貌と、政治を動かしたことで有名。
24. Ibid. p.284. エドワード・テリーの言葉。
25. Coryat, 1616. p.16.
26. Ibid. p.17.
27. Ibid. p.23.
28. サー・ロバートはイングランドからの大使ではなく、個人的にペルシア王に使えていた人物と思われる。彼もある種の冒険者であったのだろう。レイディ・シェリーとその侍女たちははこの地方を訪れたイングランド女性として確認できる恐らく最初の人物であるらしい。
29. Coryat, 1616. p.26.
30. Foster はこの画について、「生きて my next book を書くことがなかったコリヤットのために、出版者がこの象に乗ったコリヤットという画を挿入させたのだ」と取れる記述をしているが、出版された1616年には彼は存命であった。また、この画の中に鞍や象使いが描かれていないことから、これが「象に乗る」ことに無知な人物によって描かれたと考えられる。
31. Coryat, 1616. p.31-32.
32. Foster, p.265.
33. Ibid. p.269.
34. Ibid. pp.271-275.
35. Ibid. p.271. 更に、コリヤットは覚書の中にムガールの王が密かにキリスト教に改宗したという挿話を記している（Foster, p.280-282）。これはジェスイットの間に知られた話で、おそらくモンセラテのような、アクバルが催した宗教論争に参加した宣教師らの間から生まれた伝説であろう。アクバルは各宗派に論争させ、優れた教義を統合させた新宗

- 教によって多宗教の間の争いを鎮めようとしたが、モンセラテらは彼の態度をキリスト教への改宗の意図の徴と考えた。
36. 彼はフィッチのように宗教信条に関わる微妙な問題を抱えなかったこともあろうし、英国国教会関係者の友人たちを持っていたらしいことから、明快に反カソリック、反ジェスイットである。例えば、インドでは乞食が Isazaret Eesa（イエス・キリスト）よりも Bibee Maria（聖母マリア）の名において物乞いをするのはジェスイットがマリアの方を敬うからだ（Foster, p.276）、というように。
  37. トーマス・ローは正式にムガル宮廷に派遣された最初の大使であり、国王ジェイムズ1世の書簡を委ねられていたが、コリヤットは'an ambassadour from the Right Worshipfull Company of London Merchants that Trade for India'と述べている。彼はコリヤットの友人であった。また、コリヤットが書簡の中で挨拶を伝えてほしいと記した友人には、ヒュー・ホランド Hugh Holland、イニゴ・ジョーンズ Inigo Jones、そして追伸ではベンジャミン・ジョンソンが挙げられている。
  38. Coryat, 1616. p.40.
  39. Foster は'worth'のミスプリントの可能性を疑っている。
  40. Coryat, 1616. p.41.
  41. Ibid. p.42. この後にコリヤットが挨拶を伝えて欲しいと述べている長大なリストが続く。この中には、サミュエル・パーチェス Samuel Purchas、ジョン・ダン、ベンジャミン・ジョンソンらが含まれる。
  42. Ibid. p.50.
  43. コリヤットは高い台座の上に座る王に向かって演説し、それに対して王が相当額の金を与えたと述べている。そしてこの一件が、トーマス・ローとのいさかきの種になったらしい。ローはイングランド人がMugol王から金を受け取ることを喜ばなかった。
  44. Foster, p.266.
  45. 王が切り落とした首を元通りにする話である。現在知られている昔話では、古代に実在した王 Vikramasit が魔法を学ぶ王として語られることが多い。Akbar は笑話にしばしば登場するが、魔法使いとして語られるのは非常に珍しいと思われる。
  46. ここで掲載された牙のあるアンテロープの図像は Gesner, C. *Historiae Animalium* 1551-58 p.3からの引用である。サイはローマ時代には知られていたが、その後ヨーロッパでは忘れられ、Rhinoceros と Unicorn は混同された。マルコ・ポーロは東南アジアで見たサイを Unicorn と呼び、「語られているほど美しくはない」と述べている。コリヤットが見たのもインドサイであろう。16世紀始めにデューラーが、インドからポルトガル王へ贈られたインドサイを描いているが、これをユニコーンとみなすことはなかったようだ。ゲスナー本には、デューラーにもとづくサイ Rhinoceros も含まれる。こうした認識の差異はどこから現れるのだろうか。この木版画のユニコーンも Gesner, C. *Historiae Animalium* 1551-58 p.551からの引用である。（参照 THE HISTORY OF FOUR-FOOTED BEASTS AND SERPENTS AND INSECTS, Volume 1, The History of Four-footed Beasts: Taken princi-

pally from the *Historiae animalium* of Conrad Gesner by Edward Topsell, (New York; Da Capo Press, 1967))

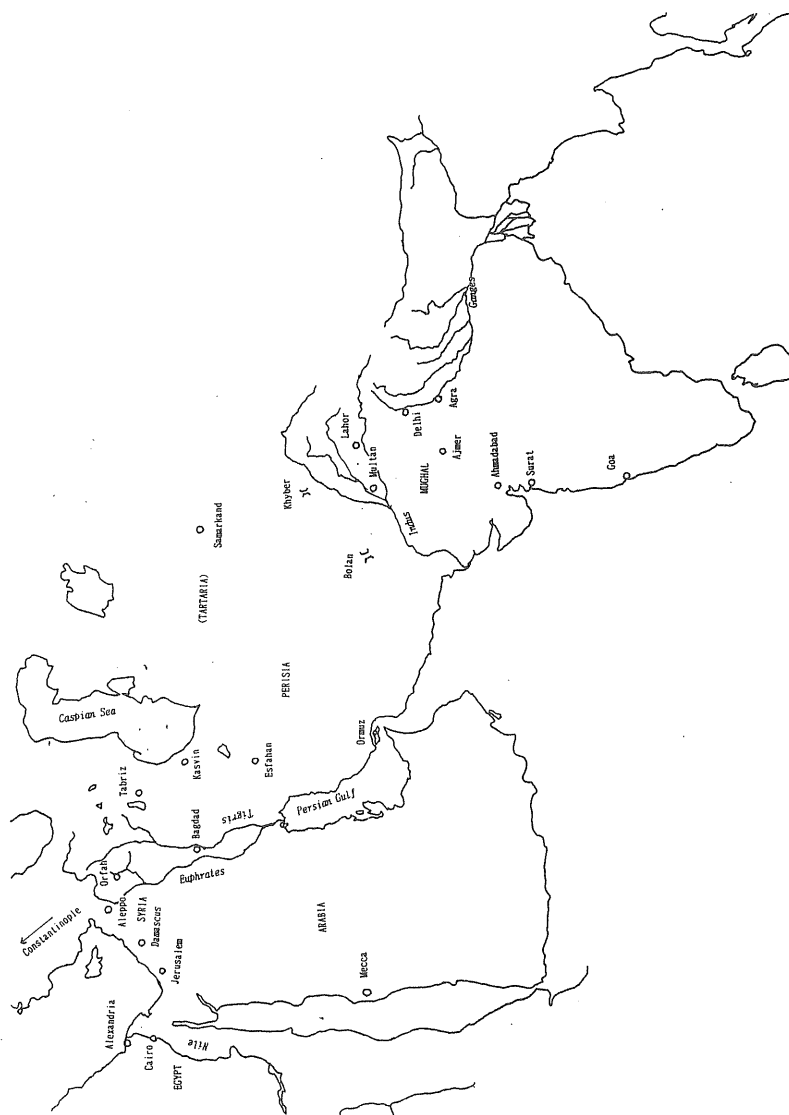


図1 関係地図



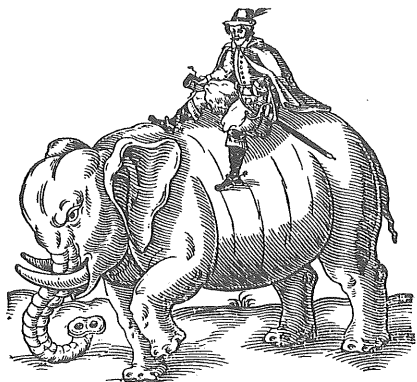


图 2



图 3



图 4



图 5